

特集

第44回 JAETP学術集会の見どころ

最新情報・詳細は
[学術集会公式HP](#)から

本号では、9月13日(土) 14日(日)に開催される第44回日本臨床運動療法学会学術集会(会場：順天堂大学 第3教育棟)に向け、ジョイントセッションおよびシンポジウムの一部をご紹介します。

ジョイントセッションでは「腫瘍循環器領域の運動療法に関する新たな知見と課題」(共催：一般社団法人日本腫瘍循環器学会)や、「MASLD (Metabolic Dysfunction Associated Steatotic Liver Disease：代謝機能障害関連脂肪性肝疾患)に関する最近の課題と運動の意義」(共催：一般社団法人日本肝臓学会)など注目のテーマが取り上げられます。またシンポジウムでは「身近な地域で運動をすすめるためのマッチング～運動・スポーツ関連資源マップの作成と活用から地域における多職種連携の推進～」など最新のエビデンスと臨床実践を繋ぐ話題が紹介されます。

紙幅の都合で今回はご紹介できなかった教育講演をはじめその他のセッションにおいても、多彩なプログラムが展開されます。ぜひ学会を通じて最新知見とともに学び、臨床現場に活かすヒントを持ち帰っていただければ幸いです。なお、次号では今回取り上げきれなかった別の企画について引き続きご紹介いたします。

(この情報は総務委員会ニュースレター編集部が作成しています)

ジョイントセッション

日程：9月14日(日) 9:00～10:20 会場：第2会場 401

腫瘍循環器領域の運動療法に関する新たな知見と課題

共催：一般社団法人 日本腫瘍循環器学会 座長：古川 裕(神戸市立医療センター中央市民病院 循環器内科)
磯 良崇(昭和医科大学 藤が丘病院循環器内科)

腫瘍循環器リハビリテーション
overview

佐瀬 一洋

順天堂大学大学院 医学研究科 臨床薬理学
早稲田大学 医療レギュラトリーサイエンス
研究所がん特化型運動施設の取り組みと
今後の展望

石野田 神

株式会社ルネサンス 商品開発部
がんリハビリ事業研究チーム
ルネサンス運動支援センター当院における腫瘍循環器
リハビリテーションの実践

谷口 良司

兵庫県立尼崎総合医療センター循環器内科

がん悪液質のリハビリテーション診療：
運動療法のエビデンスと実践

辻 哲也

慶應義塾大学医学部
リハビリテーション医学教室乳がん薬物療法時の
心肺運動負荷試験の意義

磯 良崇

昭和医科大学藤が丘病院 循環器内科



がんに関連する運動療法の最新トピックを取り上げます。リハビリテーションの実践例や、支援体制の工夫、今後の課題についても触れられます。

ジョイントセッション

日程：9月14日（日）13:50～15:10 会場：第1会場 301

MASLDに関する最近の話題と運動の意義

共催：一般社団法人 日本肝臓学会 座長：川口 巧（久留米大学 医学部 内科学講座 消化器内科部門）
加賀 英義（順天堂大学大学院 医学研究科 代謝内分泌内科学）

MASLDの運動療法： メタ解析と肝炎体操の効果

川口 巧

久留米大学 医学部 内科学講座
消化器内科部門



非肥満日本人男性における脂肪肝、 内臓脂肪蓄積とインスリン感受性の関連

門脇 聡

順天堂大学大学院医学研究科
代謝内分泌内科



食事運動療法が肝機能および 心血管リスク改善に与えるインパクト

山本 茂輝

虎の門病院 肝臓内科



写真調整中

肝疾患に対する運動療法に関する最新の知見が一堂に会します。栄養・代謝・心血管系への影響を含む多角的な視点から、運動療法の展開と今後の展望が議論されます。

シンポジウム

日程：9月13日（土）15:30～16:50 会場：第1会場 301

身近な地域で運動をすすめるためのマッチング ～運動・スポーツ関連資源マップの作成と活用から地域における多職種連携の推進～

座長：津下 一代（女子栄養大学）
長阪 裕子（順天堂大学 スポーツ健康科学部 鈴木大地研究室）

運動・スポーツ関連資源マップとは

津下 一代

女子栄養大学



横浜市における行政と医療機関の 心臓リハビリ推進連携： 推進事業からY-Hearts projectへ

磯 良崇

昭和医科大学藤が丘病院 循環器内科



藤沢市での運動・スポーツ関連 資源マップ試行事業から得たこと

小熊 祐子

慶應義塾大学 スポーツ医学研究センター・
大学院 健康マネジメント研究科



IoTを活用した医療と地域を結ぶ 運動教室の取り組みと成果

黒瀬 聖司

大阪産業大学 スポーツ健康学部
スポーツ健康学科



地域運動資源の可視化と医療連携の 実装に向けた試みー熊本運動資源 マップ活用の実践と展望ー

山下 亮

熊本健康・体力づくりセンター



運動資源の「見える化」は、医療と地域をつなぐ重要な一手となります。

本セッションでは、多職種連携や行政との協働を通じた先進的な取り組みが多数紹介され、地域に根ざした実践の展望が示されます。

Information

JAETP Web CC (ケースカンファレンス)

JAETP ケースカンファレンスは運動療法に関わるスタッフの臨床能力向上のための勉強会です。
第22回は下記の通り開催されました。

初回登録



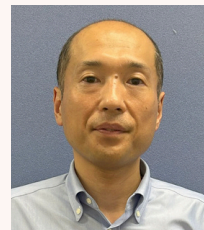
第22回 2025年6月6日(金) 18:30～

施設HP



厚生労働大臣認定健康増進施設 / 指定運動療法施設ピノスけいはんな

施設の概要や施設内での取り組み、地域の自治体・学校との連携状況、さらに健診センターや地域医療機関との連携状況(指定運動療法施設としての取り組み)をご紹介いただきました。また、運動療法処方箋による継続的な運動により高血圧症の改善が見られ、パーキンソン病においても自覚的症状の改善と活動的な生活が継続可能となった症例(成功例)や、運動療法処方箋通りの運動療法継続により糖尿病改善がみられたものの運動中の筋痙攣により運動量が低下した症例(難渋例)もご提示され、参加者と活発な意見交換が行われました。



喜多一也 先生
健康運動指導士

今後の予定として、7月から10月は休会となり、次回開催は11月7日(金)を予定しております(現在、演者を調整中です)。参加は初回のみ[ホームページ](#)から登録が必要です。

学会員はオンデマンド視聴も可能です。発表をご希望の方は事務局へご連絡ください。

運動療法に関連する注目論文を紹介します(広報委員会企画)

Journal 紹介

最近、ウェルビーイング(Well-being)という言葉聞く機会が増えました。幸福の多義的概念と訳されますが、なんとなく分かりにくいです。そもそも、同じ幸福を表すハッピー(Happy)とどこが違うのでしょうか?ちなみに、Happyは短期的・刹那的な幸せ、Well-beingは長期的・持続的な幸せを表すそうです。

さて、どのような人がウェルビーイングを感じやすいと思われますか?2021年に、特定健診のビッグデータから、それを明らかにした研究報告(Takao et al. Bio Psycho Social Medicine15:8)がありましたので、紹介しましょう。

対象は、2017年に特定健診を受けた日本人4324人です(平均年齢:49.3±8.4歳、女性:54.3%)。ウェルビーイング(持続的な幸せ)の指標として世界保健機関(WHO)の幸福指数(WHO-5)を用い、健康状態や生活習慣(睡眠、食習慣、身体活動、喫煙、アルコール摂取など)との関連を調べました。その結果、やせ過ぎの人より過体重の人の方が($p<0.05$)、眠れてい

佐藤 真治

帝京大学 医療技術学部
スポーツ医療学科
教授



ない人より良く眠れている人の方が($p<0.05$)、早食いの人よりゆっくり食べる人の方が($OR=1.63$)、幸せでした。運動との関連では、1時間以上歩いている人($OR=1.82$)や強めの運動を習慣にしている人($OR=1.32$)が持続的な幸せを感じていました。興味深かったのは、ロジスティック回帰分析の結果、持続的な幸せと最も関連性が高かったのは、研究期間中の身体活動でした。よく眠れるより、美味しくご飯が食べられるより、良く動いている人が幸せだったのです。

もちろん、横断的な研究ですので、因果関係は不明です。メカニズムも気になるところです。でも、私たちが「身体を動かしてください」と声をかけることが、人々をウェルビーイングに近づけているとしたら、素敵なことですね。以上、ジャーナル紹介でした。